

で開催．会費などなく誰でも参加できる．

連絡先 新海 明 0426-79-3728

または、加藤輝代子 047-373-3344

メーリングリスト「クモネット」

会費などなく誰でも参加できる．入会の申し込みは谷川明男まで e-mail で．

dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

言いたい！聞きたい！



ハエトリグモの論文再読（５）

世界で最初に記載された ハエトリグモ

池 田 博 明

ジョスリン・クレインの大論文は全訳をなんらかの形で出そうと思うので、前回の続きに相当する「クレインのハエトリグモ研究（下）」は後回しにして、今回は世界で最初に記載されたハエトリグモを扱う。

近代分類学の開祖はスウェーデンの博物学者リンネ（1707年生まれ）である。植物名に関してはリンネの『植物の種 Species Plantarum』（1753年）、動物名に関しては『自然の体系 Systema Naturae』第10版（1758年）を最初とする約束になっている。したがって、最初にクモを二名法で記載した人はリンネだろうと予想が立てられる。ところが、クモの場合にはそうはいかないのだ。リンネより先に二名法でクモをきちんと記載した人がいて、そ

の学名が命名規約上、有効とされているのである。

その人はカール・クラーク Carl Alexander Clerck で、刊行物はスウェーデンのストックホルムで出版された『Svenska spindlar（スウェーデン語で「スウェーデンのクモ類」という意味。ラテン語タイトルが Aranei Svecici』（1757年、Salvius 刊）である。出版は1757年だが命名規約上の日付は1758年1月1日。なお、この本にはリンネが推薦文を寄せている。

Wikipediaによると、クラークは1709年生まれ（1710年という記事もある）のスウェーデンの昆虫学者・クモ学者。没年は1765年7月22日である。17歳のときにスウェーデンのウプサラ大学（1477年創設の北欧最古の大学）に入学した。在学中に2歳年上のリンネとコンタクトがあったかどうかは知られていない。大学を卒業後は政府機関に勤め、晩年はストックホルム市役所で働いていた。もともと自然観察には関心が強かったらしいが、1739年、30歳のときにリンネの講義に影響され、翌年からクモの採集と分類を開始、行動観察も合わせて研究し、16年後に上記著作にまとめあげた。リンネの推薦もあって1756年にウプサラのロイヤル・ソサエティ・オブ・サイエンスの会員に選出されており、亡くなる直前の1764年にはロイヤル・スウェディッシュ・アカデミー・オブ・サイエンスの会員にも選ばれている。チョウの図説の刊行も始めたが、第三巻まで出版したところでクラークは亡くなってしまい、未完に終わった。

『スウェーデンのクモ類』は、オックスフォード大学が提供して2008年12月に電子化されているため、誰でもオンラインで読むことができる。ちなみに現物を古書市場で購入すると、18万円くらいである（2000年当時）。

ページの上半分はスウェーデン語による記載で、下半分はラテン語による記載。スウェーデン語だけの記載だったら普及しなかっただろう。あらためて西洋の科学、特に分類学に果たしたラテン語の役割の大きさが感じられる。もっとも、自国語で記述するというのも科学では大切なことであり、ガリレオの『星界の報告』『天文対話』などはイタリア語だったから普及した。

巻末には手彩色のプレート（図版）が6枚ある。最初はオニグモ類の記載で始まる。北欧の代表的な種類が取り上げられているため、オニグモ類などは背面図だけでも同定可能である。日本と共通の種類も結構あり、ニワオニグモ、キバナオニグモ、コウモリオニグモ、ナカムラオニグモ（本稿冒頭のクモが上向きの図参照）、キタノオニグモ、ナガテオニグモなどが目につく。

円網種を過ぎると、ヤマジサラグモ、イエタナグモ、イナズマクサグモ、アキヤマコモリグモ、チリコモリグモ、カイソクコモリグモなどが出ている。この辺は図だけで正しく同定するのは無理だが、ときどきオスの触肢が図に添えられている。カグヤヒメグモの類似種 *Araneus lunatum* には外雌器の図が添えられている。クラークは眼の配列にも注目しており、おそらく単眼の解剖顕微鏡ぐらいは使ったのではないだろうか。

記載文と図を合わせて見ていくと、ハエトリグモは主にプレート5に出ていた（以下、クモが下向きの図）。プレート5の図11に *Araneus hastatus* , 図12に *Araneus muscosus* , 図13に *Araneus scenicus* , 図14に *Araneus striatus* , 図15に *Araneus terebratus* , 図16に *Araneus v-insignitus* , 図17に *Araneus v-notatus* , , 図18に *Araneus flammatus* , 図19に *Araneus falcatus* が記載されている。



Tab. 12

Tab. 15



Tab. 15

Tab. 16



Tab. 18

Tab. 19



Tab. 1

そしてプレート6の図1に *Araneus arcuata* だった。この時代は、クモはすべて *Araneus* 属である。

それぞれ現在の学名と和名は、図11 *Dendryphantas hastatus* カラスハエトリの近縁種、図12 *Marpissa muscoca* オオハエトリの近縁種、図13 *Salticus scenicus* ゼブラハエトリ(ヨーロッパ種)、図14 *Icius striatus* 同定不能な疑問種、図15 *Sitticus terebratus* コゲチャハエトリの一種、図16・17 *Aelurillus v-insignitus*(*A. v-notatus* は *A. v-insignitua* の同物異名) ヤマジハエトリの近縁種、図17は図18・19 *Evarcha falcata* (*E. flammata* は *E. falcata* の同物異名) ホオジロハエトリの近縁種、プレート6の図1は *Evarcha arcuata* シッチハエトリと認識されている。ハエトリグモの単眼の特殊な配列を示した図がある(プレート5の図11・図12・図14、プレート6の図1)ほか、記載文の眼に関する箇所ではハエトリグモにだけ「光沢があり、輝く」といった形容詞が使われている。

プレート6のヨーロッパ・日本の共通種にはヒメハナグモ、プチエビグモ、コガネエビグモ、ツググモがあった。全体を通してみると、造網性から徘徊性へと配列されており、現在の科に相当するグループ分けがされていることが興味深い。リンネの分類には科(ファミリー)という分類規準が無かったのだが。

ところで、リンネが1758年に記載したヨーロッパ・日本の共通種は、アシダカグモ、ハラビロアシナガグモ、タイリクコモリグモ、アシハグモ、マユミテオノグモなどであった。

いまから250年も前のひと同じクモを見ているというのはなんだか感慨深いものがある。文献について新海栄一氏にお世話になった。

【参考文献】

- Clerck, C.A., 1757. Svenska spindlar, Aranei Svecici. Salvius.
小野展嗣編, 2009. 動物学ラテン語辞典。ぎょうせい。
Proszynski, J. 2007. Monograph of the Salticidae of the World. ウェブ上。
谷川明男, 2003. 日本産クモ類目録 Ver.2003 R1. ウェブ上。

吉備真備を蛛(クモ)が助けた

池田博明

天平の右大臣・吉備真備が遣唐使だったときの、唐の皇帝との知恵比べを描いた「吉備大臣入唐絵巻」は後半部分が失われている。その復元の様子を報道するNHKのテレビ番組「吉備大臣入唐絵巻の謎に挑戦」が、2010年4月29日午前9時から45分間放送された。

この番組によると、唐の皇帝が出した難題「野馬台詩」解説を蜘蛛が助けたと『江談抄』に書かれているという。「野馬台詩」は言霊詩で日本の滅亡を描いているが、文字がバラバラに綴られているため判読が難しい。難解な詩を前にして神に祈った吉備の前に一匹の蜘蛛が下りて来て、詩の文字の上を歩き、その歩いた順序を助けて吉備は詩を判読できたと言い伝えられているという。現代の研究者や日本画家によって復元された絵巻の後半部には詩文の上を糸を引いて下りた蜘蛛が歩いている様子が描かれている。

6月のNHKの番組「ダーウィンが来た！」(総合テレビ日曜日 19:30 から)でムツトゲイセキグモが主人公の番組が放送されず。現時点では放送日未決定です。